

#02_マッサージで日頃の疲れを全部出しちゃいましょうね〜♪

お隣さんのちょっと過激なマッサージ

//部屋

「では、マッサージ始めていきますよ〜」

「顔が下を向くように...うつ伏せで横になってくださいね〜」

「はい〜バッチリですよ〜！」

「本格的にやっちゃいますからね〜」

「お隣さんは疲れが溜まってるみたいですからね。

しっかり、マッサージしないと...」

「じゃあ、肩の方から...始めていきますね〜！」

「ふっ...ふっ...ふっ...ふっ...」

「力加減は〜いかがですか？」

「ふっ...ふっ...もうちょっと強い方がいいですかね？」

「んっ...普段マッサージする友達は...ふっ...女の子だから...

いつもよりも強めに...押してるんですが...」

「ふっ...ふっ...んっ...すごく凝ってるから...」

「ふっ...んっ、ふっ...いつも頑張ってるから...当然、なんでしょうけど...」

「これはもみほぐすのに...時間がかかりそうですね...ふっ、ふっ...ふうっ」

「んっ、少し力入れますね〜」

「ふっ...ふっ...んっ！ んっ！ ふっ！ ふっ！ ふう！」

「ふふっ！ いい感じ、みたいですね♡ 良かったです♡」

「ふっ...ふっ！ もう少しだけ、この調子で、揉んでいきますね～」

「ふっ！ んっ！ ふう、ふう、ふっ！ ふっ！ んっ！ んっ！」

「んっ...！ ふう～！」

「はあ、ふう...はい！ これで肩揉みはおしまいです～」

「ふふっ♡ ではこのまま、背中から腕の方も揉んでいきますね～」

「ふっ...ふっ...ふっ...」

「んっ...お隣さんって思ったよりも...筋肉、ついてるんですね～」

「普段見ている感じとは、全然違って、驚いちゃいました～」

「しっかりと、張りを取っていきますからね～」

「ふっ...ふっ...ふっ...んっ、んっ、ふう...ふう...」

「ふう...ふう...んっ、これでよしと」

「ふう...」

「ではここからは背中からお尻にかけて揉んでいきますよ～」

「よいしょ...つと」

「こっちもぎゅ～ぎゅ～って...」

「少しくすぐったいかもしれませんが、我慢してくださいね～」

「ふっ、ふっ...んっ...ふっ...ふう...」

「ふう〜」

「後は足も揉んでいきますね〜」

「んしょ、んっ、ふっ...ふっ...ふっ...」

「足、すごく張ってますね〜んっ、ふっ...ふっ...」

「いつも頑張ってる証...ですね♡」

「ふう、ふう...んっ、ふっ、ふ、ふう...んっ、んっ...ふう...」

「ふう〜...どうですか？ 気持ちよかったですか〜？」

「でも、まだ終わりじゃないですからね〜」

「次は仰向けになってください〜」

「お隣さん...どうしたんですか〜？」

「もしかして、気持ち良すぎて動けなくなっちゃった...とか？」

「ふふ、そしたら私が、仰向けにさせてあげますね〜」

「んっ...ふっ...」

「...あっ」

「お隣さん...そこ...大きくなって...」

「良いんですよ〜気にしないでください〜」

「マッサージで血流が集まるとそうなっちゃうこと、あるみたいですから〜。

私のマッサージが良かったってことですもんね♡」

「全然、気にしてないです〜」

「でも～…全身をほぐすのなら…

お隣さんのこっちも、リラックスさせないといけませんよね？」

「ふふ。当然ですよ～無理は良くないですから～」

「触っただけでピクって反応してますし～。私に任せてください♡」

「わあ♡ こんなに大きく…」

「恥ずかしがらなくて大丈夫ですよ～これもマッサージの一環だって、

思っちゃってください～」

「なので、リラックスして受けてください♡」

「優しく、シコシコ…ってしちゃいますから♡」

「ふう…ふう…ふう…ふう…」

「力加減はどうですか～？」

「強すぎたり、弱すぎたり…なんでも、言ってくれていいですからね」

「たくさん気持ち良くなってください～」

「ふう、ふう…ふう、ふう…」

「お隣さんの…とってもガチガチですね～」

「中々スッキリするタイミングもなかったんですかね？」

「いつも沢山頑張ってますもんね」

「知ってますよ～私はお隣さんのお隣さんなんですから～」

「お隣さんが頑張ってたかったら、こういうことも言わなかったですし」

「労いたって思ったんです」

「ふう...ふう...はあ...ふう...ふふっ♡」

「...段々と先の方から透明なお汁が出てきましたね〜♡」

「私の手、気に入っていただけただけで良かったです♡」

「ふふっ...もっともっと、やっていきますからね〜」

「こうやって...出てきたお汁を、くちゆくちゅーって...♡」

「ふう、ふっ...はあ、はあ、んんっ♡」

「ふふっ、ここ、ゾクゾクってしちゃいました？ そしたら〜」

「重点的に擦ってみますね〜♡」

「ふう、ふう♡ はあ、ふう...んっ♡ はあ、はあ...ふう...♡」

「すごいですね〜さっきも大きかったのに...

お隣さんの、どんどん膨らんでいってます〜」

「こんなに大きい...んんっ♡ ふっ、んう...」

「あっ...すみません。もじもじしちゃって...」

「その.....お隣さんが気持ち良さそうにしてくれるのが嬉しくて...」

「ふう、んっ♡ 私も、興奮してきちゃったみたいなんです...♡」

「んっ...マッサージ中なのに、ごめんなさい...」

「でも...その...お隣さんが、良ければ...」

「ふう...んっ...ふうふう...少し、私も...楽しんでも...いいですか？」

「ふふっ♡ ありがとうございます」

「では、お言葉に甘えて...」

「もっといい...マッサージ、しちゃいますね♡」

「ちょっとだけ、待っててください♡」

「ふう...ふう...んっ♡」

「ふふっ♡」

「ふう...♡ いいですよ、見ても」

「むしろ...お隣さんになら見られたらいいというか...ふふ」

「では、失礼します～」

「ふう...んんっ♡」

「近くで見ると...ますます大きく感じます♡」

「それに...くんくん、んんっ♡」

「とっても男らしい匂いがしますね♡」

「くんくん...ふう～♡ 頑張ってる人の匂いです♡」

「ふふ、ではこれを私のおっぱいで...こうして...」

「ふふっ、包んじゃいました♡」

「こうすれば、お隣さんの全部を、気持ち良くできるって思ったんです」

「では、ぱふぱふ～ってしていきますね～」

「んっふっ...ふう♡ ふっ、ふう...ふっ、んんっはあ、はあ...ふう♡」

「んっ♡ お隣さんのが、私のおっぱいの中で...

ずりゅ、ずりゅって動いてます♡」

「ふう、ふう...んんっ♡ 熱や、匂いが...感じられて...私も...気持ちいいです♡」

「くんくん～んんっ♡」

「ふう、ふう...ん、ふう...♡ はあ、ふう...ふうう...」

「はあ、はあ...んっ♡ はっ、ふう...んんっ、ふう、ふう...♡」

「ふふっ♡ 気持ちいいですか～？」

「んんっ♡ もっと、もっと～してあげますからね～」

「はあ♡ はあ♡ んっ、ふっ♡ はあ、はあ...ふう♡」

「ふっ...んはあ♡ はあうっ...んんっふう、ん...んっ...んふふ♡」

「ふう...ふう...んん♡

お隣さんので...おっぱい、ベトベトになっちゃってます～」

「いいんですよ～。たくさん気持ち良くなってきてるってことですから～」

「でも、まだまだこれで終わりにはできないですよね～」

「もっと、気持ちよくなる方法、あるんですから～」

「んっ...ちゅっ♡」

「ふふっ♡ お口を使って...ね♡」

「れるっ...ちゅっ♡ ちゅぷっ、ちゅっ...ちゅっ...んふう♡

はあ、はあ...ちゅっ、ちゅっ♡」

「ふふっ♡ ちゅっ、ちゅっ、ちゅぷっ、ちゅっ...ちゅりゅりゅ...

ちゅっ、ちゅうう...♡」

「ふう...♡ ふふ...おっぱいとお口...気に入ってくれたみたいですね」

「もっともっと、しちゃいますからね」

「んちゅっ、ちゅっ...ちゅぷ...ちゅっ、ちゅうう...」

「ふう...ん、んちゅっ、ちゅ...れろ...れろお～...ちゅっ♡」

「れろ、れろ、れろれろ、れるちゅっ...んふ♡

んちゅ、れろれる...れるりゅっ♡」

「はあふう...んちゅ、れろれろ...れろ、れりゅ...んふっ♡

んっ、れろれろれる...♡」

「ふう♡ ふう♡ はあむ♡ んじゅ...ちゅっ、ちゅぷっ...ふっ♡」

「んっ、んっ♡ んじゅ、れる、れるれる、れるじゅぷっ♡」

「ふうふう♡ じゅぷ、じゅぽ、じゅぽっ、じゅぶじゅぽっ...ちゅっ♡」

「んんっじゅりゅ、じゅちゅ、ちゅ、ちゅじゅりゅ...

じゅ、じゅぷ...じゅぽっ...っぷ...はあ♡ はあ♡ ふうう...♡」

「ぷはあ...ふう、ふう...んんっ♡」

「お隣さんの...おちんちん、こんなに大きくなって♡」

「んんっ...このままお胸で出してもらうのもいいですけど...」

「やっぱりここは、1番気持ちのいい方法で、スッキリしてもらった方が...

いいですよね？」

「ふう、ふう...」

「お隣さん...最後のスッキリは...私のおまんこ...使ってください♡」

「ん...気にしないでください♡」

「私は、お隣さんが気持ち良くなればそれでいいですし...それに...」

「んんっ♡ はあっ...ふう、ふう♡」

「ふう～...ふふっ...んん♡」

「私のココも...んんっ♡ はあ、ふう...♡」

「もう、お隣さんののが欲しくて...たまらないんです～」

「ですので...おちんちん...いただきちゃいます♡」

「あっ...んんっ♡ はああ♡」

「はあ♡ はあ♡ ふっ...んんっ...♡」

「私のおまんこ...具合はいかがですか～？」

「んんっ、お隣さんのおちんちんをマッサージをしてたら...♡

もう、トロトロになっちゃって...♡」

「んふっ♡ 一緒に気持ち良くなって～...スッキリしましょうね♡」

「んっ♡ はっ♡ んんっ♡ んっ♡ ふう♡ ふっ♡ んんっ♡

はあ♡ はふう♡」

「はっ♡ あっ♡ んっ、んんっ♡ お隣さんの...んんっ♡

気持ちいい所に...当たっちゃいますう～んんっ♡

はっ、んっ...んふっ、んん♡」

「はあ、ふう♡ んんっ♡ はっ、はっ...ふっ♡ んんっ...ああっ♡

はあっ...んっ...いっ♡」

「んっふふっ...♡ はふっ...んっ♡

声...漏れちゃって...んんう...はっ、んっ、んっ! んっ!」

「お隣さんは...んっ！ はあ...ふっ♡ ふふっ♡

聞くまでもない...みたいですねえ...んんっ♡ はあうっ...♡」

「どんどん固くなって...私の奥の方を、突いてくるので～...んんっ♡」

「おまんこを、楽しんでくれてるって、ん...ことです...よねえ♡」

「はあうっ♡ んっ♡ はっ、はっ♡ ふっ...んんっ♡ ああっ♡ んんんっ♡」

「はふう...んっ♡ んっ♡ んふう...ふっ、はあう...ふふっ...んっ♡ んんっ♡」

「んっ！ お隣...さあん♡ はあっ！ ふっ！ んんっ！ はっ、はっ♡

はうう...んんっ♡」

「ふう...ふう...んんっ♡ はっ、はっ♡ はっ♡ ふう...んっ...んんんっ！」

「んんっ...ごめんなさい、私の方も...余裕...無くなってきちゃいました...」

「んっ...んんんっ、ふっ...ふう...はっ、はっ...はあう...♡」

「で、でもお...安心してくだ...さいねっ...んっ♡ んんっ♡

はあう...ふう...んんっ♡」

「お隣さんが...スッキリするまで...んっ！ ふう♡」

「私は...絶対に動くの...んんっ♡ やめませんから♡」

「だから...んんっ！ 出たくなったら...ああっ、ふう、んんっ！ いつでも...出してきて...

大丈夫...ですからねえ♡」

「ああ...んっ、ふう...はあ♡ はふっ♡ あんっ♡ あっ、あっ♡

あっ♡ はあう...ふう...！」

「んんっ、んっ、んっ♡ んんっ♡ あっ、そこお...♡ んあっ、いいですよ♡」

「はあ、ふう...んんっ...んっ！」

「じゃあ、そろそろ...仕上げて、いきましょう♡」

「んんっ！ はっ！ はあっ♡ はあっ、はっ...んんっ♡」

「ふふっ♡ おまんこ...の奥...トントン、トントンって...

お隣さんののが、突いてきます♡」

「これ、私も...んんっ！ んっ！ んっ！ んんっ！」

「はあ、はあ...ふふっ、そろそろ...出そう...ですかあ？」

「んんっ♡ はいっ...私の中で...そのまま、出して...ください♡」

「大丈夫ですから♡

それに...1番気持ちのいい所に出した方が...いいでしょうし♡」

「おまんこの奥に...どびゅーって出しちゃってください♡」

「ほら、いきましょう？ 一緒に...いきましょう♡」

「んんっ♡ おちんちんから、濃厚でべっとりした精液をお...

吐き出しちゃってください♡」

「はあ、はあ♡ ああ♡ イク...イク...イクイクイクイク...♡」

「せえ～の♡」

「びゅっびゅびゅ～♡」

「んんっ♡ はああ♡ はっ、んんんん♡」

「はあ、はあ♡ お隣さんののが、奥までいっぱい...♡ んっふう...♡」

「お隣さん♡ たくさん、出してくれましたね♡ うふふ♡」

「マッサージは、いかがでしたか？」

「ん...私で良ければ、いつでもお手伝い...しますからね」

「身体の疲れも...おちんちんがムラムラした時でも...」

「いつでも私を、頼ってください♡」